

## 〔研究ノート〕

## 転害会関連諸図巻(手向山八幡宮蔵)と寛政期の好古趣味について

特別展「天之美祿 酒の美術」では、かつて東大寺八幡宮とも呼ばれた手向山八幡宮の「東大寺八幡宮転害会楽器図絵」(以下「楽器図絵」と表記)をお借りし展示しました。転害会(てがいえ)という祭礼で用いられた舞楽面を描いた図巻です。多数の舞楽面をそれぞれ表、裏、横の三方から写し取っています。展覧会でご紹介したのは、登場人物が飲酒をする「胡徳楽(ことくらく)」という曲で用いられた面の部分です(図1)。現在、国会図書館(明治24年購入)と京都府(大久保紫香旧蔵)に写本が所蔵されており、その内容が尊ばれ流布した様子も見られます。

手向山八幡宮には「楽器図絵」の他にも、転害会にまつわる道具や行事を記録した図巻が残されており、いずれにも八幡宮の神職を務めた紀延興(1756～1828)の署名が記されます(1)。この人物が和歌などの文事を嗜んでいたことはすでに知られていますが(2)、延興が描いたというこれらの図巻を見ると、絵画の素養もかなりのものだったとわかります。

ここでは、転害会関連諸図巻の中でも、「転害会図絵」の制作時期について特に確認しておきたいと思います。「転害会図絵」は、「奈良地域関連資料画像データベース」で公開されておりインターネット上で閲覧できます(<http://mahoro>。

[roba.lib.nara-wu.ac.jp/index.html](http://roba.lib.nara-wu.ac.jp/index.html))。三巻からなり、祭礼の行列や奉納舞楽の様子などを描いています。第一巻の終わりには長い跋文が記され、末尾に「文政四年秋 神主従三位紀延興書 六十六歳」とありますが、一方で巻頭には「権神主従四位下紀延興校写」と記されています。位階に注目すると、巻頭ではいまだ「従四位下」のまま(三巻とも)ですが、跋文の書かれた時点では「従三位」に昇叙されています。手向山八幡宮には歴代神官の系図も伝来しており、そこに記される延興の叙任歴を確認すると、寛政三年(1791)に従四位下、寛政九年(1797)に従四位上、享和三年(1803)に正四位下、文政三年(1820)に従三位となっています。「転害会図絵」冒頭での位階は「従四位下」なので、制作が始められた時期は寛政三年から寛政九年の間と推定されます。

図巻の制作は、長く中断していた転害会復興を目的に行われたと推測されますが、寛政年間には古物への関心の高まっていた時期である点も注意を引きます。この頃には、古物を記録した書物がいくつも作られており、東大寺八幡宮の宝物も記録の対象となっています。まず、松平定信(1759～1829)の行った文化活動として名高い『集古十

種』には、八幡宮伝来の古面類も記録されています。『集古十種』編纂を目的として行われた実地調査の記録である『寺社宝物展覧目録』巻四(柴野栗山・住吉広行編)を見ると、寛政四年(1792)にはすでに「東大寺八幡宮」の宝物調査が行われています。また、藤貞幹(1732～1797)編纂の『集古図』巻八には、東大寺八幡宮の神輿の図が掲載され、何度か修正を加えながら図を制作した旨が寛政六年(1794)の干支とともに記されています。手向山八幡宮の神職として『集古十種』や『集古図』の編纂事業に触れた延興が、古物を記録する意義を強く意識するようになったとも考えられるのではないのでしょうか。『集古十種』楽器篇の凡例には、「仮面は正面と側面を並べて全体の姿を見られるようにする」という掲載方針が書かれており、「楽器図絵」において各面を三方向から描く姿勢へと受け継がれた可能性も考えられます。

「転害会図絵」に話を戻しますと、冒頭には寛政九年(1797)以前の肩書きが記され、跋文には文政四年(1821)とありました。また、転害会関連諸図巻に記される年紀は、寛政年間と文政年間の二期に区分されます。寛政年間から文政年間までには約20年の隔りがありますが、その間ずっと制作を

続けていたのでしょうか。あるいは、文政年間に整理を兼ねて清書した図巻が含まれているとも考えられるでしょう。明確な答えをここで出すことはできませんが、延興が資料集めに奔走していた様子は「古楽器並鞍図」と外題のある図巻からも知ることができます。「古楽器並鞍図」には、他の寺社の宝物を写した図や、狩野正栄の図の写し(図2)が見られます。後者は、南都楽人であった芝家(3)とのつながりを活かして模写させてもらったようで、八幡宮所蔵品に限らず様々な情報を収集していたことがわかります。

どの程度の歳月をかけて諸図巻が制作されたかの詳細は不明ですが、地道な情報収集の積み重ねによって完成した点は疑いようがありません。手向山八幡宮でご所蔵の転害会関連諸図巻は、古物を記録する文化活動の広がりを示す興味深い作品群といえるでしょう。(仁方越洪輝)

## 参考文献

- (1)『特別陳列 大和の神々と美術 手向山八幡宮と手搔会』奈良国立博物館、2002年
- (2)荒井真理亜「紀延興『雄山記行』〈上司家蔵〉翻刻」『国文学』85、2002年
- (3)『図説雅楽入門事典』柏書房、2006年

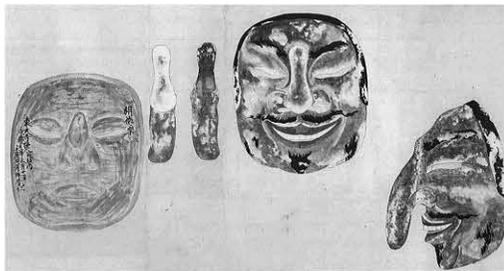


図1 胡徳楽面(「楽器図絵」より)



図2 春鶯囀兜(「古楽器並鞍図」より)

季刊 美のたより No.217

令和3年12月24日

発行 大和文華館